# メルケル時代が幕を閉じる 欧州の未来を握るドイツ総選挙

木村　正人
在英国際ジャーナリスト

## 欧州の没落に歯止めがかからなくなる恐れ

［ロンドン発］ドイツ一国にとどまらず、27カ国４億4600万人を擁する欧州連合（EU）の未来を決める独総選挙が９月に迫ってきた。ギリシャの粉飾財政に端を発した欧州債務危機で圧倒的な存在感を得たアンゲラ・メルケル独首相の時代が幕を閉じる。これは「終わりの始まり」を告げる鐘の音になるやもしれない。

いつまで経ってもくちばしが黄色く、妄言が止まらぬフランスのエマニュエル・マクロン大統領は、世論調査で極右政党・国民連合のマリーヌ・ルペン党首に支持率の逆転を許している。欧州難民危機やイギリスのEU離脱を乗り切り、未曾有のコロナ危機ではEU初の債務共通化までまとめ上げたメルケル首相の退場で「欧州の没落」に歯止めがかからなくなる恐れがある。

与党キリスト教民主同盟（CDU）とバイエルン州を地盤とする姉妹政党キリスト教社会同盟（CSU）の統一首相候補選びは、CDUのアルミン・ラシェット党首とCSUのマルクス・ゼーダー党首が互いに譲らず、期限の４月18日になっても協議は決着しなかった。

2017年の前回総選挙でCDUの総得票数（小選挙区）はCSUの4.3倍。CDUより小さいCSUから統一首相候補が出たことは過去に２度あるが、いずれもCDUが持ち直すまでの「つなぎ役」に終わっている。

「ドイツ保守主義最後のロックスター」と人気を集めるマルクス・ゼーダー氏（2018年10月、筆者撮影）

同月16日に公表された世論調査ではドイツ有権者の44%、CDU/CSU支持者の72%が統一首相候補にふさわしいのはゼーダー氏と答えた。ドイツで最も人口の多いノルトライン・ヴェストファーレン州の首相であるラシェット氏は、メルケル首相の中道路線を引き継ぐ「和」の政治家。無難な選択肢である。しかし、有権者は2005年から続くメルケル政治にうんざりしている。CDU/CSUの支持率はコロナを抑制できている間こそ40%まで回復したが、第三波を抑え切れなくなったとたん25%に急落。代わりに急上昇したのが旧二大政党の社会民主党に取って代わった環境政党、90年連合・緑の党である。

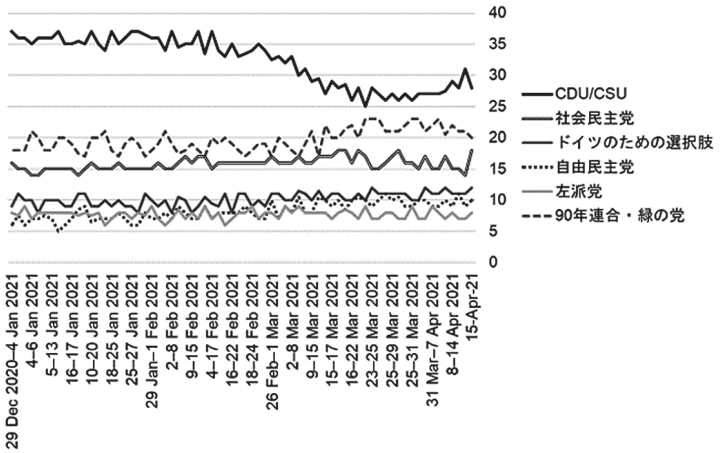
## 「ドイツ保守主義最後のロックスター」

CDU/CSUが秋の総選挙で勝つには、反EU、反移民を掲げる極右政党・ドイツのための選択肢や中小企業経営者らを基盤にする中道政党・自由民主党から票を奪う必要がある。議員が選挙に強いリーダーを求めるのは世の常。そこで「ドイツ保守主義最後のロックスター」と世間を騒がせるゼーダー氏を担ごうというCDU議員が出てきた。

ドイツは2009年に欧州債務危機が起きるまでいつもフランスに寄り添うように控えめだった。共産主義政権下を生き抜いた旧東ドイツ出身のメルケル氏は、自分の本心を悟られない用心深さを身に着けている。メルケル氏が本当にギリシャを救済するつもりなのかどうか市場も見極められず、危機を深めてしまった。

小学生のころ、水泳の授業でメルケル氏は飛び込み台から飛び込むのをためらった。終業ベルが鳴ったとたん飛び込んだというエピソードが残っている。メルケル氏は自分の性格をこう分析する。「私はもともと勇気がある方ではないが、思うに、適切な時に合理的に判断して、それに従う勇気がある」

ドイツの政党支持率




出所：各種世論調査をもとに筆者作成

米誌『フォーブス』の「最も影響力のある女性」に10年連続で選ばれたメルケル氏の出した解は、平和と繁栄の礎になってきた欧州統合のプロジェクトは絶対に壊さないということだった。残念なことにイギリスはEUを去り、フランスの衰えが歴然とした今、ドイツはメルケル氏のように爪を隠す必要はなくなった。

バイエルン州にはシーメンス、BMW、アディダスといった世界に名だたる大企業がひしめく。個性派で強烈なカリスマを持ち、時に冷酷、家父長的なリーダーシップを発揮するゼーダー氏の口癖は「私の場所はバイエルン」。地域の伝統や慣習、法と秩序を重んじるパターナリズムを発散させている政治家だ。

## ゼーダー流は欧州政治には通じない

ゼーダー氏はバイエルン州の優越性を隠さず、その豊かさが他の州に配分されることに難色を示してきた。シリア難民ら100万人近くがドイツに押し寄せた欧州難民危機では、受け入れを表明したメルケル氏を批判し、反移民、反EUのイタリア右派政党・同盟のマッテオ・サルビーニ書記長（前副首相兼内相）を連想させた。

2018年には、バイエルン州首相官邸に十字架を掲げ、すべての州政府機関でも同じように十字架を掲げるよう求めた。十字架は宗教的なシンボルではなく、「バイエルンのアイデンティティーと生き方の基本的な象徴だ。それは慈善、人間の尊厳、寛容などの価値観を表している」と語った。

数年前、ゼーダー氏は毎年恒例のカーニバルにマリリン・モンローに仮装して登場した。「男性優位のCSUの未来は女性だ」とジョークを飛ばし、「マリリンはカルト的な人物であり、私もそうかもしれない」と豪語した。ド派手なパフォーマンスは、「政界の道化師」と呼ばれるボリス・ジョンソン英首相に劣らない。

コロナ対策の優等生ドイツはEUの中で人口1000人当たりの病床数が最も多く、看護師と医師の数も上位５カ国に入る。公衆衛生を担当するロベルト・コッホ研究所を中心としたデータ収集と分析、PCR検査によるコロナウイルスの探知、介護施設での感染封じ込め、集中治療室（ICU）などコロナ病床の確保がうまく機能した。

昨年３月、ゼーダー氏の前任のホルスト・ゼーホーファー内相はオーストリア、スイス、フランス、ルクセンブルクなどとの国境管理を一時復活させ、不要不急の旅行を控えるよう要請。２週間後、メルケル首相も州と協力して家族以外の集まりを２人に制限、1.5メートルの感染防止距離をとるよう求めた。

連邦国家のドイツでは公衆衛生の責任は16の州と約400の郡の地方公衆衛生当局に委ねられる。イギリスのような全国的なロックダウン（都市封鎖）は行われなかったが、ゼーダー氏はいち早く外出禁止令や休校措置を実施し、バイエルン州での支持率は一気に94%までハネ上がった。

ゼーダー流パフォーマンスはバイエルン州やドイツ国内では受けても、EUという欧州レベルで受け入れられない。CDUの大勢は最終的に無難なラシェット氏を支持し、CSUのゼーダー氏は潔く身を引いた。イギリスの政治劇に馴染んでいる筆者にはにわかには信じられない展開だった。世間で全く人気のない統一首相候補を担いで選挙に勝てるわけがない。

予想通り、CDU/CSUの支持率は一段と急落し、ついに緑の党に逆転を許してしまったのだ。「政界一寸先は闇」である。９月の総選挙までに何が起きてもおかしくない。CDU/CSUは緑の党との連立を視野に入れているとは言うものの、二番でも十分というのがドイツ流の政治なのか。

メルケル氏に続いて２代連続の女性首相になる可能性が出てきた40歳のアンナレーナ・ベーアボック氏は「すべてが可能だ」「国のために立ち上がる」と意気軒昂だ。2030年までに温室効果ガスの排出量を1990年比で70%削減する目標を掲げる。彼女が首相にならなくても、緑の党の政権入りはほぼ確実だ。

この秋、ドイツから「緑」の風が吹く。